

戦前のガイドマップからみたオホーツク地域 ～鳥瞰図と案内文の分析から～

平井純子

1. 研究目的

本研究は、1936（昭和11）年6月に発行されたガイドマップ「北見」の中の鳥瞰図「網走支廳大観」（図1）に表現された内容と案内文を分析することにより、戦前におけるオホーツク地域について考察するものである。

鳥瞰図（Bird's-eye-view）とは高いところから見下ろしたように描いた風景図または地図であり、大胆なデフォルメを施されたものが江戸時代より描かれている。特に大正から昭和にかけては商業資本と結びついた鳥瞰図が、吉田初三郎（1884-1955）を牽引役に多数描かれている。

本稿で鳥瞰図とこれに付随する案内文を地域分析に用いる理由として、これらには制作者及び制作依頼者の主観的な地域認識に関する知識が盛り込まれており、その情報は鳥瞰図読者に伝達され、伝播していくと考えられる。作成時に把握されていた地域像が明らかになるとともに、人々に伝えられた地域イメージを読み取ることができる（乙部2002）と想定されるからである。

戦前の北海道における観光旅行のピークは1936（昭和11）年とされる（佐藤1999）。この年の鳥瞰図刊行数は戦間期¹⁾で最大となっており、観光旅行と鳥瞰図作成は連動していたと推定できる（図2）。この時期に刊行された図を分析することによって、当時の観光のあり方と地域の側面を理解することができると想定される。



図1 「北見」より鳥瞰図「網走支廳大観」全図、筆者所蔵

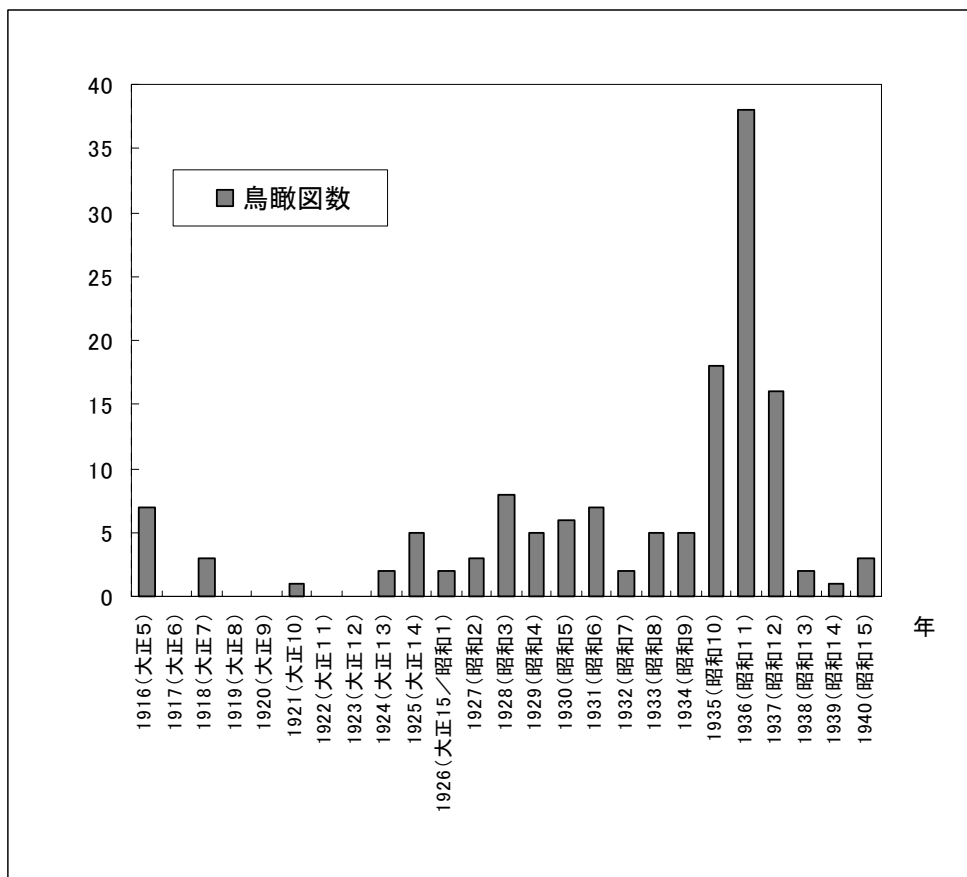


図2 戦間期(1916~40)における北海道の鳥瞰回数の推移
乙部(2008)より引用

なお、「網走」と「北見」の範囲とその意味する場所は時期により変化がみられることから混乱を避けるため、本稿で「オホーツク地域」とする範囲は、現在の網走支庁管内(図3)を示すこととする。



図3 オホーツク地域

2. 既往研究と研究方法

本研究と既往研究の関連について、戦前期の鳥瞰図に関するものと戦前のオホーツク地域の観光に関するものに分けて整理する。

大正から昭和期にかけての鳥瞰図は、美しくダイナミックな描き方から愛好者が多くみられ、特に近年では大正・昭和期を中心に活躍した鳥瞰図絵師吉田初三郎に関連する書籍が発行され²⁾、博物館や資料館などで企画展、特別展が開かれたり³⁾、観光施設で紹介されたりしている⁴⁾。

この時期の鳥瞰図を用いた研究は、鳥瞰図から温泉地の景観や表現内容を分析した関戸（2002, 2007）や鳥瞰図絵師松井天山に注目した中西（2002）、松島を対象にした鳥瞰図の表現内容の推移を検討した中西（2007）など、黎明期の観光地を分析するための手法として、歴史地理学の分野で進められている。また、近代の官庁街の立体的な空間構成を分析するため、吉田初三郎の鳥瞰図を用いた松浦（2006）など、建築の分野での鳥瞰図の利用が積極的に試みられている。

一方、戦前のオホーツク地域に関する観光については、網走市史など各自治体の地方史の中で述べられるが、地域全体としての考察は管見の限り見られない。北海道観光史について概観した佐藤（1999, 2008）は、北海道観光史全体の流れの中で1936（昭和11）年にオホーツク海沿岸地域で皆既日食がみられたことを当該地域の観光化の契機の一つとしてあげているが、当該地域の観光のあり方については触れてはいない。

これまで、筆者は昭和初期の知床を対象として描かれた鳥瞰図とこれに付随する情報を分析し、知床では山岳美を中心とする自然と先住民族の遺跡が観光の中心として表現され、またこの地域が生活するに適した場所であることを強調する案内が付されていたことを指摘し、鳥瞰図の作成が全国的に盛り上がりをもせていた観光の振興とともに、観光という形で地域を外部から再認識されることにより成立した風景観が主張されていることを示した。（乙部2008）。本稿では、知床の鳥瞰図と同年の1936（昭和11）年のオホーツク地域を対象に描いた鳥瞰図を用い、知床を含めたより広い範囲での分析を試みる。

本稿は以下のように構成される。

3. では鳥瞰図「網走支廳大観」が盛り込まれるガイドマップ「北見」の概要を示し、当時の地域の状況を踏まえつつ記載内容を分析する。4. では鉄道省が1936（昭和11）年に発行したガイドブック「日本案内記」の記載内容との比較を行い、さら

に同年10月に描かれた吉田初三郎の「北海道鳥瞰図」の表現内容との比較を行う。

3. 4. を踏まえ5. では当鳥瞰図が表現したオホーツク地域の特徴と鳥瞰図作成の意図を考察し、本研究で得られた知見と今後の課題を示す。

3. ガイドマップ「北見」の概要とその記載内容

鳥瞰図裏面の記載によると、「北見」の発行者は「北海道網走支廳内 北見物産協會」と記される。しかしながら、現在ある「北見物産協會」は、1942（昭和17）年の北見市制後の組織であり、本図の発行者との関係は無い。「北見物産協會」は網走支庁内を管轄する公的な機関であったと想定されるものの、現在網走支庁内にこのような組織はないため、詳細は不明である。

著作権者兼印刷所として「東京市日本橋區濱町三ノ五一 日本名所圖絵社 小山吉三」と記されている。また図中にある落款には「常光 子金」とあり、絵師金子常光の作であることがわかる。小山吉三と金子常光は、1916（大正5）年に吉田初三郎が構えた「大正名所図絵社」の一員であった。1922（大正11）年、同社の専務を務めていた小山は業務上のトラブルから画工であり吉田の高弟であった金子を連れだつて離反し独立、「日本名所図絵社」を設立した。吉田の鳥瞰図が有名になるにしたがい、各地で同様の鳥瞰図が描かれるようになったが、小山の「日本名所図絵社」はその嚆矢となり（堀田2009）、また最大のライバル社ともなった（長瀬2000）。戦前に金子が描いた北海道内の鳥瞰図は、室蘭や洞爺湖、小樽、層雲峡などでも残されている（乙部2008）。

「北見」は、表紙、網走支廳管内圖、鳥瞰図「網走支廳大観」、そして鳥瞰図裏面に掲載される文字情報の「北見案内」から構成される。折りたたみ形式で、広げた寸法は約18×72cm、折りたたみば約18×11cmで、携帯に便利な大きさである。以下でそれぞれのパーツで表現される内容について述べていく。

（1）表紙

表紙には表題の「KITAMI 北見」とある（図4）。網走市史によると、歴史的通称としてオホーツク



図4 表紙

海沿岸を「北海岸」と称しており、ここから樺太が見えることから、北と見をとって「北見」となったとし、当初は現在の宗谷支庁を含む範囲を示していたが行政所轄の変更にもない、網走支庁管内の別称として明治30年代から普遍化し40年代には定着したが、1942（昭和17）年に野付牛町が市制を施行して「北見市」となると「北見」の概念が変化した。鳥瞰図裏面の「北見案内」には、『北見』とは北見國の謂にして網走支廳管内の其の大部分を占む」とし、現在の北見市を示すのではなく、紋別郡、常呂郡、網走郡、斜里郡を指すとしている。したがって、本図の発行された1936（昭和11）年においては、北見＝網走支庁管内として解釈される。

表紙に描かれるのは、知床連山を背景に網走港と網走の街並み、そして網走湖とみられ、手前にはシラカバまたはダケカンバと、トドマツとみられる針葉樹が描かれる。現在の網走市内呼人地区近辺の上空約400mからの視点と似ているが、あくまで架空の視点である。

裏表紙には「常光 子金」の落款がみられる。

（2）網走支廳管内圖（図5）

表紙裏にある網走支廳管内圖は平面図で、「比例尺百万分之一」と縮尺が記載されている。鳥瞰図の描画範囲を示しており、山容、水系など地形を示す注記を陸地測量部1924（大正13）～25（同14）年発行の5万分一仮製図⁵⁾にほぼ準拠する形で記載されている。しかし仮製図で漢字表記をしているものをカタカナ表記にするもの、例えば羅臼岳をラウシ岳、海別嶽をウナベツヌプリ⁶⁾、海別川をウナベツ、佐呂間別川をサロマベツ川、温根湯をオンネユ、またはカタカナを漢字表記しているもの、例えばサロマ湖を猿澗湖、がみられる。



図5 網走支廳管内圖

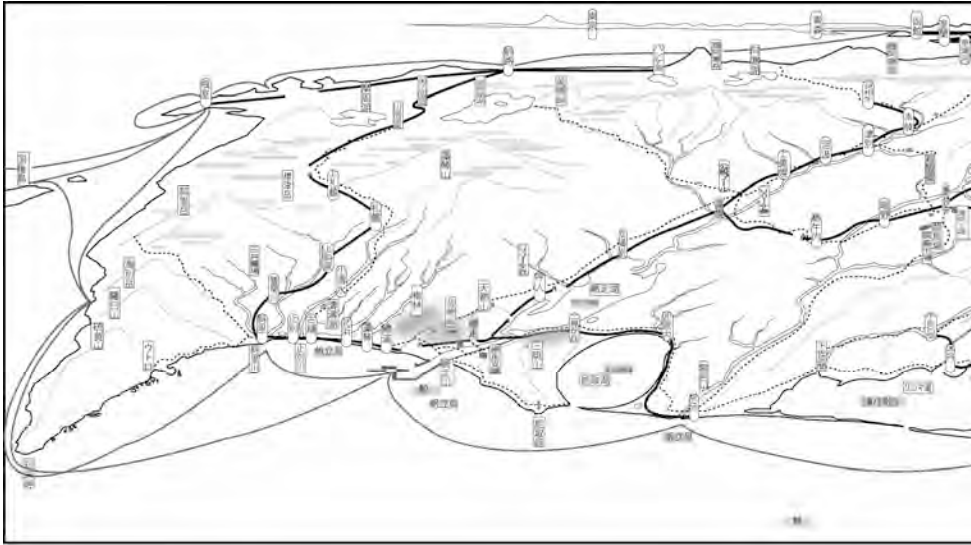


図6 鳥瞰図「網走支」

(3) 鳥瞰図「網走支廳大観」

まずトレース図を示す(図6)。15×52cmの横長の画面に、知床岬から宗谷岬までをオホーツク海沖の架空の視点から俯瞰している。湾曲している地形を直線的に、対象とする網走支庁の範囲を实际よりも広く、強調して描いている(図7)。凡例はないが、線の描写による人工的要素として、赤いラインの鉄道網、肌色のラインの道路網、白いラインの航路がある。また面的描写による山容、水系などの自然要素と、ランドマークとなる人工構造物があり、道路上には自動車、航路上には船舶が人工的要素として描かれる。また、本図の大部分は夏の景観であるが、網走、温根湯、遠軽、紋別市街にはサクラやウメとみられる花が、天塩岳や北見富士、チミケブ沼周辺には山に紅葉を表現する赤や黄色の着色がなされている。桜の名所は必ず描く

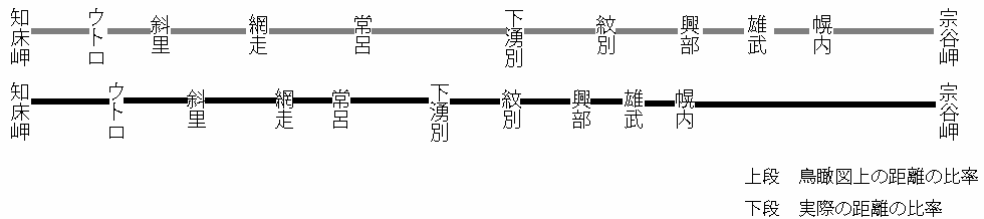
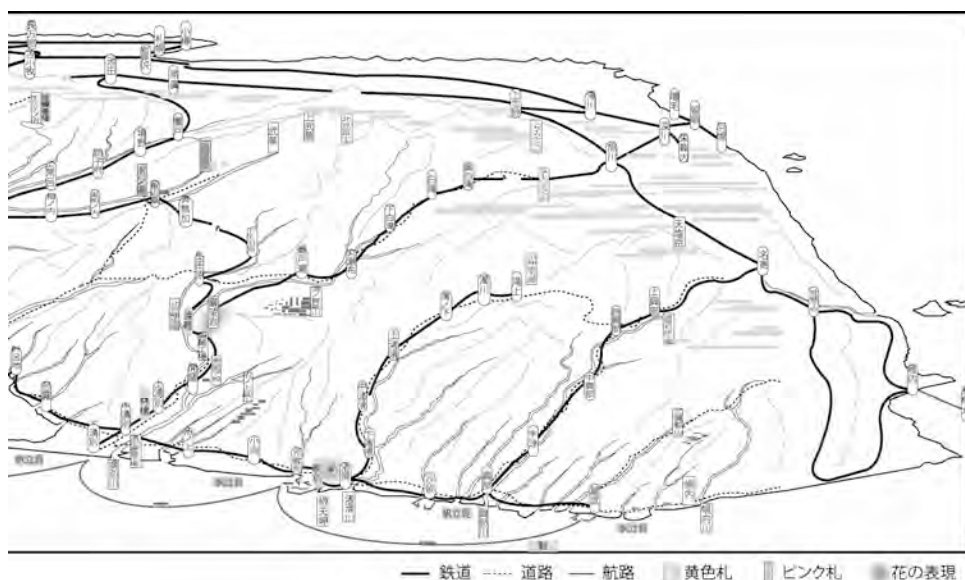


図7 絵図上の距離と実際の距離の違い

戦前のガイドマップからみたオホーツク地域
～鳥瞰図と案内文の分析から～



「大観」トレース図

(堀田2009) という吉田初三郎の表現を踏襲するものである。図の上部には札幌や小樽、長万部、室蘭、函館と道南部の主要都市が鉄道を介して結ばれ、さらにその先には青森、東京と道外の地名が並び、富士山の影をも描いている。同時期の鳥瞰図の多くで富士山が描かれるが、当図もこれを踏襲している。図右手の枠外に「網走支庁大観」と題字があり、枠内右上に「常光 子金」の落款がみられる。

図の中には170もの札が書き込まれており(表1)、項目ごとに札の色や形状で区別をしている。黄の四角の札は15あり、主要産物を記載する。『帆立貝』と記載されるのが、雄武、沙留、紋別、サロマ湖沖、常呂、網走、濤沸湖沖の7か所で最も多い。網走支庁漁獲高の推移によると(図8)、1933(昭和8)年～36(同11)年にホタテが極めて豊漁だったこと、オホーツク地域が北海道内随一のホタテ産地として飛躍的に伸びていた時期であったことが分かる。養殖について、網走湖の『ワカサギ養殖』、能取湖の『帆立貝養殖』、チミケプ沼の『姫鱒養殖』の3か所で記載がある。サロマ湖では『牡蠣ノ産額全道一』とある。『鮭』は雄武-興部沖とサロマ湖沖の2ヶ所に、『鯨』は網走港近くに札が置かれる。唯一海産物でないものが、湧別の『林檎』である。明治期に導入されたリンゴは日本北限のリンゴとして、昭和初期には盛んに生産されていた。

黄の長丸の札は、主要都市を示す。紋別、遠軽、野付牛、美幌、網走であり、そ

表1 札の形状とその内容

色	形状	内容	札数	
黄	四角	産物	15	
	長丸	主要都市名(町)	5	
白	四角	人工的要素	鉱山	2
			工場	3
			市場・種馬場	3
			農場	1
			公共施設	3
			学校	1
	四角	自然的要素	温泉	2
			山・峠	16
			湖沼	8
			河川	8
			地名/名勝	7
			岬	3
		島	1	
	長丸	地名	89	
ピンク	四角	温泉	3	

れぞれ交通の要所にある。白の長丸の札は89あり、地名を示している。

ピンクの札は3か所あり、『温根湯温泉』『若松温泉』『ポン湯』とすべて温泉を示す。『温根湯温泉』のオンネユとはアイヌ語で「大きな湯の出る場所」を意味する。温泉の湯けむりが2か所で上がり、人工的な建造物が7棟ほど描かれ、さらに周囲にはピンク色の花が描かれている。『若松温泉』の図上での表現は、建造物が1棟と湯けむりが1本あがっているが、シンプルである⁷⁾。『ポン湯』は湯けむりが大小2本描かれるが、建造物は見られない。ポンユとはアイヌ語で「小さな湯の出る場所」で、オンネユに対してつけられた地名である。ここはアイヌたちにより利用されており、1897(明治30)年に屯田兵の河原田万蔵がカボチャと交換に権利を譲り受け、使用の許可を取り経営を始め、1930(昭和5)年に現経営者の祖父にあたる田中栄朔が買収しており、当時はポン湯温泉「永楽館」と称していた⁸⁾。

白で四角の札は赤で縁取りがされており、58か所ある。人工的要素と自然的要素の双方が含まれる多種多様な事象を表現しているため、他の札に比べ種々雑多の感は否めない。鉱山の記載が『鴻之舞鉱山』と『沼ノ上鉱山』で見られるが、他の人工構造物に比べに建物などが詳細に描かれている。温泉が2か所含まれるが、いずれも網走支庁管外に位置するものである。

鳥瞰図完成後に修正されたと思われる箇所が『小清水』『知床岬』『国後島』の3ヶ所でみられる。『小清水』は抜けていた地名の補充とみられるが、『知床岬』

戦前のガイドマップからみたオホーツク地域
～鳥瞰図と案内文の分析から～

と『国後島』に関してはなぜ修正されたのか、詳細はわからない。

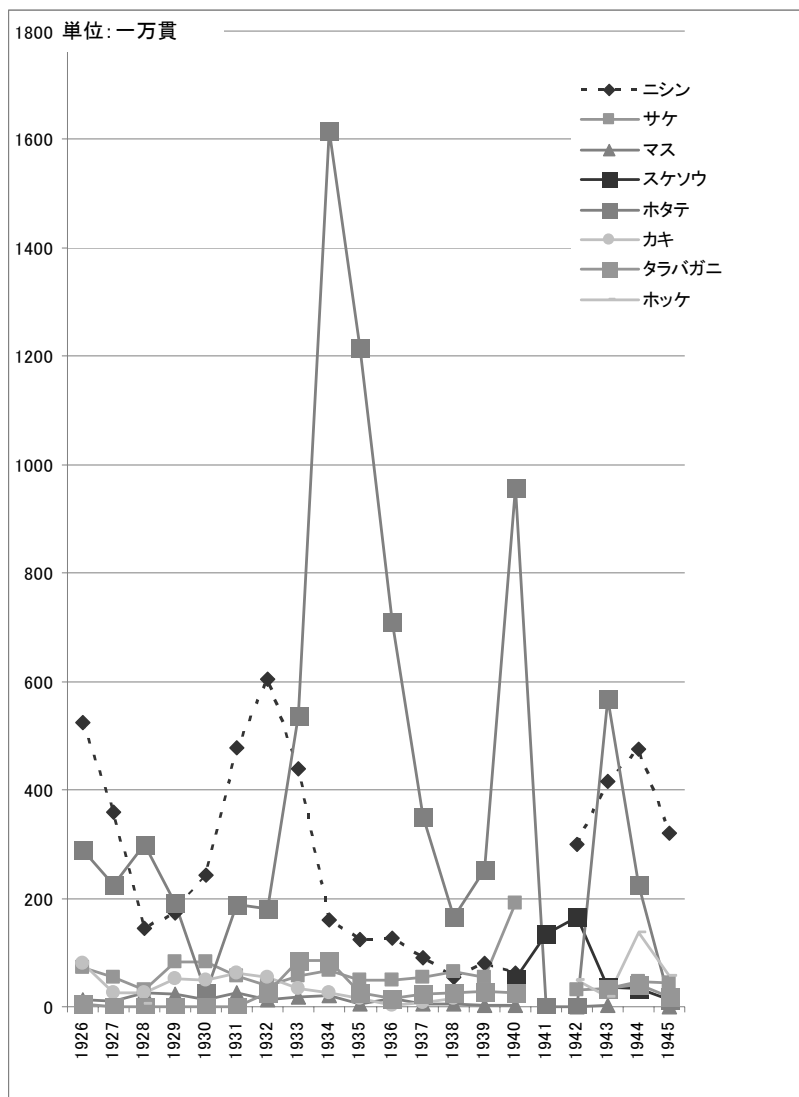


図8 網走支庁管内の主要漁獲高（昭和元～20年）

（網走市史(p1222-1223)のデータをもとに筆者作成，1貫=3.75kg）

(4) 北見案内

鳥瞰図の裏面には文字情報として、当該地区の沿革、管内町村名、気象、交通、港湾、産業概観、視察遊覧地、北見のおみやげ、北見音頭、北見小唄、そして、「伸び行く『北見』」と題した文章と、11枚のモノクロ写真が掲載されている。

「沿革」では、480年余り前から現在までの歴史が述べられる(表2)。同年に描かれた「観光の斜里岳と知床半島」にある沿革の内容と重なっている部分がみられる。

表2 北見案内「沿革」の内容

年	西暦	事象
宝徳3年(480年余り前)	1451	松前藩の始祖武田信廣が蝦夷酋長を伐ち、天文年間に平定する。
慶長9年	1604	幕府より蝦夷島を管する3カ条の制書を受け、松前氏の権力が確定。
貞享年間(240年余り前)	1684-88	北見国宗谷に宗谷場所を設け、北見国全部を総括。
明治2年	1869	開拓使が置かれる。北海道と改称、斜里、網走、常呂、紋別の4郡とし、開拓使支庁を根室に置く。
明治12年	1879	網走他3郡役所を網走町に置く。
明治15年	1882	開拓使を廃止、函館、札幌、根室の三縣をおき、根室縣の所轄下に。
明治19年	1886	三縣を廃止、北海道庁を札幌に置く。
明治30年	1897	網走3郡役所を網走支庁と改称し、今日に至る。

「管内町村名」掲載される24町村のうち、紋別郡の紋別町と遠軽町、常呂郡の野付牛町、網走郡の美幌町と網走町が町であり、鳥瞰図上で黄色の長丸で示されているものである。

「気象」では、「気候概ね順調にして各種作物の生育に適す」とし、1、2月にはマイナス15度を下回るが4月以降気温は急昇し8月に最高になり、10月から徐々に下降していくとする。北海道東北部の各地方と比べ遥かに温暖であるのは、暖流が流れるから⁹⁾で根室や釧路のように寒流にさらされないからだ、過ごしやすさを強調している。

「交通」について、国有鐵道は幹線4支線7あり、総延長は550km、敷設が決定し

ている路線完成後は、「拓殖の進展」「物資の輸送」「資源の開発」に大いに貢献するという。このほか、私設鐵道、殖民軌道¹⁰⁾、官行鐵道¹¹⁾があるとする。また道路は総延長4200km、上川、釧路、根室方面へは複数の道があり、漸次発達しており、自動車による貨客の輸送も多いという。

「港湾」に関し、海岸線は292kmに及ぶが単調で変化に乏しく、陸上交通の整備に伴い海運が衰退傾向にあり、港湾として利用されるのは網走と紋別の2か所だけで、そのほかは漁港としてのみの利用は惜しいとするが、沙留と雄武は整備が整ったことで今後漁業の発達が期待できるとする。

「産業概観」について、農業、漁業、林業、畜産業、鉱業、工業、商業の7業種をあげ、それぞれの生産額と主要産物を丁寧に紹介している(表3)。農業について、この地域で最も重要であり重大資源であるとし、中でも薄荷については、世界総生産額の6割を占め、我が国の重要な輸出品であると強調する。また小麦について、カナダ産と比べても遜色なく、甜菜¹²⁾については、作付面積・生産額が首位で、その糖分の含有率も一番だという。しかし、産物として筆頭にあげている米に関する記載はない。漁業について、3月の海明けから、網走、常呂、紋別、下湧別、雄武、沙留の諸港に布陣し勇敢果敢なる漁撈戦を展開しているとする。「北見の銀鮭」「帆立の北見」として有名であり、加工業が盛んになりつつあるという。また、養殖事業に力を注いでいることを強調しており、鮭、チカ¹³⁾の人工孵化事業は2湖10河川、帆立や牡蠣などの孵化事業は50か所66万坪^(ママ)の面積に及ぶとする。林業について、全道一の木材供給地であり、国内だけでなく、支那方面へも輸出しているとする。大正8年以降、北海道廳により、留辺蘂町、置戸村、津別村、遠軽町、滝上村で官行斫伐事業が行われているが、植林にも力を入れていることを述べている。畜産業については、北海道における第二期拓殖計画に基く牛馬百万頭計画が好調であることを強調する。鉱業について、それぞれの鉱山が活発に操業していることを声高に訴えている。工業については、製品を羅列してはいるが、それぞれの規模がまだ小さいため、今後の発展に期待を寄せている。また商業について、地方財力の充実が必要であると述べている。

表3 北見案内「産業概観」の内容

産業	生産額	数	主要物	関係団体／主要箇所
農業	2200万円	2400戸	米, 薄荷, 馬鈴薯, 青豌豆, 小麦, 燕麦, 裸麦, 大豆, 甜菜, 亜麻など	北見郡農會, 北見畜産組合, 北海道林業會網走支會, 産業組合網走支會, 北見農具協會, 北見經濟更生協會
漁業	600万円		銀鮭, 帆立, 鱒, 鱈, 鯖, チカ, 鰯, タラバ蟹, 牡蠣	北見水産會, 網走外二郡鮭鱒養殖水産組合, 紋別郡鮭鱒養殖水産組合, 猿澗湖漁業養殖振興組合
林業	400万円		エゾマツ, トドマツ, ヤチダモ, オニクルミ, ホーノキ, イタヤ, カエデ, カバ	北海道林業會網走支會, 北海道廳網走支廳奨励苗圃
畜産業	100万円		牛 8000頭, 馬 39000頭,	北見畜産組合, 北見家畜保険組合
鉱業	800万円		金, 銀, 珪藻土, 珪酸白土, 黒曜石, 大理石	鴻の舞鉱山, 北隆, 北の王, 昭和, 沼の上, 常呂, 生田原等の鉱山
工業	1000万円		<科学工業>薄荷取卸油, 魚油, 魚肥, 製材・木製品, 吋材, 枕木, 鉛筆材, ベニア板, 経木など <食品工業>鱒・蟹の缶詰, 澱粉, 乳肉製品, 清酒	
商業	4000万円	27万		工業組合2, 商業組合10, 卸売市場8, 木炭同業組合1, 酒造組合1, 銀行10, 出張所3

「視察観光地」としては、温根湯温泉、美幌峠、天都山、斜里嶽、若松温泉、丸万梅林、北見郷土館を取り上げている。温根湯温泉については、設備が整った北見唯一の仙境として、毎年数万人が訪れるとし、留辺蘂駅より二里余りで、自動車では15分（40銭）であるという。鳥瞰図上での表現も詳細である。美幌峠について、阿寒国立公園の一部であり景観の素晴らしさを絶賛する。野付牛町と美幌町から自動車の便があり川湯、弟子屈市街に通じるとする。天都山について、道立公園の候補地で絶好の場所であり、網走町から自動車約15分で達するという。斜里嶽について、海拔1544mで頂上には各種の高山植物がみられ貴重な学術資料であるという。また、四季を通じて登山者が激増しているという。若松温泉について、野付牛市街から一里、自動車の便があるといった簡単な説明のみである。丸万梅林について、釧網線北濱駅から一里、網走市街から四里で北海道第一の梅園であるとし、梅3000本、5月末に満開になるという。また北見郷土館について、「先住民族」と「アイヌ時

代」の考古学的資料と「北見」の行政文献を多数所蔵、一般公開しているとする。

北見土産協会の指定の「北見のおみやげ」としては、水産加工品3、菓子類10、木工品4と石工品1を取り上げている(表4)。ホタテ、ワカサギ、カニや薄荷などの農漁業での産物、また木材を利用したものがあげられている。

表4 北見案内「北見のおみやげ」

海産加工品	ワカサギ佃煮, 帆立加工品, 蟹加工品	網走町
菓子類	薄荷羊羹, 薄荷豆, 白樺センベイ, グリンピース羊羹	野付牛町
	遠軽羊羹	遠軽町
	帆立センベイ	紋別町, 常呂村
	薄荷羊羹	中湧別市街
	金華まんぢゅう	網走町, 斜里村
	蟹羊羹, 七福餅	網走町
木工品	エリマキ洋杖, 石楠洋杖	網走町
	白樺細工	野付牛町
	各種土産品	温根湯温泉
石工品	黒曜石細工	置戸村, 野付牛町

「伸び行く「北見」」では当該地方を売り込む文章が綴られる。開発の余地が多くあり、産業と風光において優位にあるこの地域で、「来たりて業を為す者、来たりて遊ぶ者の最も喜ぶ所なりと信ず。来訪の士よ、躍進北見の実態と成長の動向を仔細に眺め、以て当地方の利用開発に心あらんことを。」と結んでいる。

そして、これら文字情報の上部に人工建造物、産業、観光資源を写した11枚のモノクロ写真が添えられている(表5)。筆頭に取り上げているのは、本図を発行した北見物産協会がある北海道廳網走支庁の建物で、鳥瞰図中には建物と札が描かれている。これと同様の人工建造物は野付牛町市街と網走町市街で、鳥瞰図にはいくつかの建物が描かれている。写真の中には、「産業概観」に詳しい記載のなかった水田の風景写真がある。広大な水田であり、写真の右上に防風林とみられる樹木が写っている。斜里嶽の写真では遠景で斜里嶽が、近景には牧場がみられる。11枚のうち、産業を表現するものが6、人工建造物が3、観光資源が3¹⁴⁾で、産業の様子を積極的に掲載している。

表5 北見案内に掲載された写真

写真のタイトル	人工建造物	産業	観光資源
北海道廳網走支廳	○		
水田の展望		○	
国有林及官行斫伐鉄道		○	
野付牛町市街	○		
斜里嶽		○	○
温根湯温泉			○
住友鴻の舞金山		○	
網走町市街	○		
帆立の乾燥		○	
民謡踊北見音頭			○
氷下牡蠣の採取		○	

4. 「日本案内記」と「北海道鳥瞰図」との比較

「日本案内記」は日本の黎明期におけるガイドブックで、1929（昭和4）から鉄道省の編集により東北編、関東編、中部編、近畿編（上・下）、中国四国編、九州編、北海道編の8巻が順次刊行された。北海道編は1936（昭和11）年、「日本案内記」シリーズの最後の巻として刊行されている。掲載範囲は渡島、後志、石狩、天塩、北見、胆振、日高、十勝、釧路、根室、千島で、基本的に鉄道線に沿って北海道全域を紹介する。それぞれの名所、旧跡が取り上げられ、「記事中に示した官公廳、銀行、會社、工場、旅館、料理店、娛樂場、土産物等はその若干を示すに止めた」と例言で述べており、当時の観光拠点となりうる場所の掲載に重点が置かれていたと思われる。

「北海道鳥瞰図」は1936（昭和11）年、絵師吉田初三郎が描いた北海道全域を描いた鳥瞰図で、発行者は北海道廳であり、同年10月に行われた北海道陸軍特別大軍事演習に合わせて発行された¹⁵⁾。この鳥瞰図に描かれているのは描く範囲が広いこともあり道内各地の特筆すべき名所・旧跡となっており、天皇巡幸に伴い整備され、また、天皇の目に触れても問題のない場所のみが記されたものであるといえる。

上記2点からオホーツク地域に含まれる部分を取り上げ、「網走支廳大観」と記載内容を比較した（表6）。

戦前のガイドマップからみたオホーツク地域
～鳥瞰図と案内文の分析から～

表6 「日本案内記」「北海道鳥瞰図」との掲載内容の比較

	ガイドブック	鳥瞰図	
	日本案内記	網走支廳大観	北海道鳥瞰図
雄武町		北隆鉱山	
西興部村		道管石灰工場	
遠軽町		遠軽	遠軽町
	遠軽郷土博物館		
	巖望岩	巖望岩	
	サナブチ家庭学校	家庭学校	
	家庭学校農場		
		製酪工場	
紋別町	紋別町	紋別	紋別町
		沼ノ上鉱山	
		辨天岬	
	鴻之舞鉱山	鴻之舞鉱山	
生田原村	北ノ王金山		
下湧別村		湧別家畜市場	
置戸村	置戸の大森林		(置戸大森林)
佐呂間村	猿澗湖	サロマ湖	猿澗湖
留辺蘂町	留辺蘂町	留辺蘂	留辺蘂町
	留辺蘂温泉		
	温根湯温泉	温根湯温泉	温根湯温泉
野付牛町	野付牛町	野付牛	野付牛町
	開基碑		
	野付牛神社		
	北聯薄荷工場	薄荷工場	
	屯田兵記念館		
	野付牛公園		
	河西牡丹園		
	常呂川	常呂川	
		若松温泉	
網走町	網走湖	網走湖	
	網走港	(網走港)	
	天都山	天都山	
	網走町	網走	網走町
	三眺山	三眺山	
		網走支庁	
		能取岬	(能取半島)
		北見郷土館	
		瀧沸湖	
	網走神社		
	桂ヶ岡砦跡		
	最寄貝塚		
	二見ヶ岡		
	能取湖	能取湖	
	中西梅園	丸万梅林	
美幌町		美幌町	美幌町
	美幌峠	美幌峠	美幌峠
斜里村	斜里岳	斜里嶽	斜里岳
	斜里三井農場	三井農場	
		海別岳	海別岳
		羅白山	羅白岳
		硫黄山	
		知床岬	知床岬
	*太字は写真あり	*太字は裏面に解説あり、カッコは解説のみ	

すべてで記載されているのは、紋別、留辺蘂、野付牛、網走の4町と温根湯温泉、サロマ(猿澗)湖、美幌峠、斜里岳である。主要都市のひとつ、遠軽町に関する記

載は「日本案内記」には掲載されておらず、「網走支廳大観」には記載のない遠軽郷土博物館が掲載されている。網走町内について、「日本案内記」にみられる網走神社、桂ヶ岡砦趾、最寄貝塚¹⁶⁾、二見ヶ岡については「網走支廳大観」に図像で表現されているものの名称を記した札はなく、解説もみられない。野付牛町内について、「日本案内記」で神社や公園など7か所の解説がみられるが、「網走支廳大観」には薄荷工場の札があるのみである。「網走支廳大観」と「日本案内記」とで共通する産業に関わるものは、鴻之舞鉦山だけであり、北龍鉦山、道宮石灰工場、製酪工場、北見種馬場、沼ノ上鉦山、湧別家畜市場は「網走支廳大観」でのみ見られる。一方、置戸の大森林については「北海道鳥瞰図」裏面の解説でとりあげられ、「日本案内記」でも解説されるが、「網走支廳大観」には見られない。「日本案内記」で取り上げる留辺蘂温泉は2点の鳥瞰図に記載がなく、また若松温泉の記載は「網走支廳大観」のみである。

鳥瞰図中の札の表現について、「北海道鳥瞰図」では赤を用い明瞭に最重要箇所を示し、その他の名所は黄色、主要都市を青で表現し、その他は白といったように効果的に札を使い分けているのに対し、「網走支廳大観」では黄色、白、ピンク色の3色で示しており、メリハリに欠ける感が否めないものとなっている。

5. ガイドマップ「北見」からみた戦前のオホーツク地域

1910(明治43)年から1926(昭和元)年の北海道における第一次拓殖計画に引き続き、1927(昭和2)年から施行された第二次拓殖計画は、深刻な経済恐慌と凶作・水害の頻発により行き詰まり、1935(昭和10)年には計画改定を余儀なくされた(網走市1971)。当図が描かれたのは、その直後の1936(昭和11)年である。全国的に観光旅行がピークを迎えていた(白幡1996)とはいえ、オホーツク地域における状況は厳しく、とりわけ農業にとっては米の収量が激減するなど大きな被害を出していた(表7)。

もちろん、鳥瞰図「網走支廳大観」の表現からはこのような状況は読み取ることにはできない。オホーツク地域の肥沃な大地、豊富な資源、限りない発展の可能性を強調し、また大陸的な自然の美しさと温泉、阿寒国立公園へのアクセスの良さを表現している。しかし一方で、鳥瞰図で描かれ強調されている表現が裏面の解説では触れられていない、または裏面の解説で力説する内容が鳥瞰図の中では表現されていない、といった齟齬が散見される。例えば、産物として黄色い札のある湧別の林

戦前のガイドマップからみたオホーツク地域
～鳥瞰図と案内文の分析から～

表7 網走支庁略史（網走市史，斜里町史，網走信用金庫史，網走歴史の会HPを参考に筆者作成）

観光関連	年		地域の状況
網走商工会が『網走名勝案内図』発行	1929	昭和4	
	1930	昭和5	○網走港，紋別港の修築工事完成
			□北見鉄道会社，止別～小清水間，開業
国立公園法公布	1931	昭和6	○日本捕鯨会社（のち日本水産捕鯨部）事業場開設
			□釧網線全通
			□石北線全通
			▼冷害
	1932	昭和7	▼日照り低温，霖雨，水害と続き，未曾有の凶作
			○タラバガニ漁解禁
	1933	昭和8	□網走自動車商会設立，定期乗合自動車運行
	1934	昭和9	▼農作物不作，特に水稻・豆類の被害甚大
	1935	昭和10	□藻琴～東藻琴間に殖民軌道運行
文部省，網走町桂ヶ岡砦趾（チャン）を史蹟に指定 網走観光協会設立			▼低温で豪雨のため水害，凶作となる
町営網走観光ホテル完成	1936	昭和11	△知床硫黄山の火山活動活発化
北見物産協会，鳥瞰図『網走支廳大観』を発行			△北見沿岸で皆既日食観測
網走町，鳥瞰図『網走大観』3000部を配布			□湧網東線（網走～常呂）開通，西線（中湧別～中佐呂間）も
斜里町，鳥瞰図『観光の斜里岳と知床半島』を発行			
文部省，網走町最寄貝塚を史蹟指定			
桂ヶ岡に北見郷土館開設			
網走湖を中心とする景勝地一帯を道立公園とする運動始まる			

○＝漁業関係，▼＝農業関係，□＝交通関係，△＝その他を示す

橋については，裏面に何の解説もなく，裏面の解説文で農業が第一の産業であるとし薄荷や甜菜，小麦が取り上げられていながら，鳥瞰図には薄荷工場の白い札がみられるのみで作物の表現はみられない。また裏面の写真にある，広大な水田の風景がどこでみられるのか鳥瞰図には表現されていない。

名所・旧跡として観光すべき拠点について，同時代の資料と比較すると，自動車がまだ普及していない時代において交通手段となる鉄道での観光地利用が考慮されておらず，全道的な視点で見たときに取り上げるべき地点はおさえているものの，「北見」で取り上げる拠点は観光のためのものよりも産業に関連する事項が多い。例

えば同時期のガイドブックでは扱わない、鉱山や工場、種馬場を積極的に表現し、裏面の写真においても産業に関するものが過半数を占めるのである。網走町内については、同年に網走町内をメインにした鳥瞰図「網走大観」¹⁷⁾を網走町が刊行していることに影響されているためか、1935(昭和10)年に文部省が桂ヶ岡砦跡を史蹟指定しているにも関わらずその表現はなく、また札などの記載も少なくなっていた。

吉田初三郎やこの時代の鳥瞰図の多くはある主題をもって描かれ、その主題に沿った自然的要素や人工的要素が極端に強調される。鉄道がそれぞれの地域を結び、それぞれの主題にそったポイントを分かりやすく表現するためのデフォルメがなされる。

ガイドマップ「北見」は、観光の盛り上がりとともに鳥瞰図刊行が進んだ時期に発行されたものであったが、主たる発行目的はオホーツク地域の周知と行き詰まりつつあった開拓民の誘致を図ったものであったと考えられる。地域発展のための資力と人材を得るため、鳥瞰図内に地域内の多くの要素を入れ込もうとしたが、発行者の意図の焦点が定まらないために、図中において表現される内容と解説に食い違いがみられ、戦前のオホーツク地域が地域として何をアピールしようとしているのかが見えづらいものとなっている。戦前のオホーツク地域としての立ち位置の不明確さが強調されており、これは当時の地域状況を表しているのである。さらに、鳥瞰図を描いた金子常光の描法にもメリハリのなさがみられ、当図のあいまいさが助長されているように思われる。

本稿では、観光の盛り上がりとともに多く刊行された鳥瞰図の一つ「網走支廳大観」が含まれるガイドマップ「北見」を分析し、これが必ずしも観光のためではなく、産業振興と開拓民誘致のための手段となっていたことが示唆された。しかしながら同時期の北海道に鳥瞰図は多くあり、一つ一つの図について比較検討し、当時の観光のあり方、地域のあり方を考察していく必要がある。これらを今後の課題としたい。

注

- 1) 第一次世界大戦の終結から第二次世界大戦まで、大正から昭和初期を指す。
- 2) 例えば、湯原編(2002)、堀田(2009)、益田(2009)など。
- 3) 例えば、企画展「描かれた都市の姿ーパノラマ地図の系譜ー」2007年3月3日～5月6日・堺市博物館、特別展「パノラマ地図とモダンの旅～吉田初三郎と大正・昭和の北九州～」2008年10月11日～11月24日 北九州市立自然史・歴史博物館など多数み

- られる。
- 4) 岩手県宮古市の浄土ヶ浜ビジターセンター（陸中海岸国立公園内2010年4月オープン）では縦2.8m、横14.8mに拡大された吉田初三郎の「岩手県観光鳥瞰図」（岩手県立図書館蔵）が展示されている
 - 5) 参考にした5万分1仮製図は以下の通り。興部、紋別、沢木、上渚滑、立牛（以上大正13年発行）、斜里嶽、ルシャ川、島戸狩、斜里、羅臼、知床岬、ウトロ、サロマ湖、遠軽、鴻ノ舞、網走、女満別、小清水、美幌、藻琴山、屈斜路湖、摩周湖（以上大正14年発行）。
 - 6) ヌプリとはアイヌ語で「山」を意味する。
 - 7) 現在若松温泉は源泉が利用されるだけで、温泉地としての利用はなされていない。
 - 8) 現在は北見温泉（ポン湯）として旅館三光荘で利用されている。
 - 9) 対馬海流は宗谷岬を超えると宗谷暖流と名前を変えオホーツク海を流れる。
 - 10) 大正から昭和初期にかけて北海道で建設がすすめられた簡易軌道。当初の動力は馬であり、開拓民の利便性を高めるために道路の代わりに敷設された。
 - 11) 木材運搬のための産業鉄道であり、森林鉄道という。明治末から敷設され、オホーツク地域では温根湯や置戸、丸瀬布に建設されていた。
 - 12) サトウダイコン。砂糖の原料となる。
 - 13) キュウリウオ科でワカサギと非常によく似ている魚である。鳥瞰図上には網走湖でワカサギの養殖が取り上げられているので、チカとワカサギを混同している可能性がある。
 - 14) 複数にわたるものがあるため、合計は11にはなっていない。
 - 15) 1927（昭和2）年愛知県における陸軍特別大演習の後、吉田初三郎が描く鳥瞰図が天皇の御座所に掲げられるのが慣例となった（堀田2009）。吉田の描いた1929年の「茨城県」、1930年の「広島県」「岡山県」、1931年の「熊本県」、1932年の「大阪府」、1933年の「石川県」「福井県」、1934年の「埼玉県」の各鳥瞰図は、陸軍特別大演習の開催年と出版年が一致している。
 - 16) 現モヨロ貝塚。
 - 17) 筆者は未見。

参考文献

網走市史編纂委員会編『網走市史下巻』網走市、1971、p. 1615

網走信用金庫60周年史編纂委員会『網走信用金庫史』網走信用金庫、1987、p. 254

- 乙部純子「19世紀末の横浜外国人居留地の景観－「横浜真景一覧図絵」からみた土地利用状況」（『歴史地理学』44－5，2002），pp. 22-37
- 乙部純子「昭和初期の知床観光－「観光の斜里岳と知床半島」にみる地域の魅力」（『知床博物館研究報告』第29集，2008），pp. 43-57
- 佐藤郁夫「北海道観光史」（『産研論集』22，1999），pp. 25-47
- 佐藤郁夫『観光と北海道経済－地域を活かすマーケティング』北海道大学出版会，2008，p. 214
- 白幡洋三郎『旅行のススメ』中央公論社，1996，p. 256
- 関戸明子「鳥瞰図に描かれた伊香保温泉の景観」（『えりあぐんま』8号，2002），pp. 23-4
- 関戸明子「温泉地の鳥瞰図の特色と表現内容－熱海温泉を事例として－」（『平成15～18年度科研費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 近代日本の民間地図と画像資料の地理学的活用に関する基礎的研究』，2007），pp. 11-28
- 鉄道省『日本案内記 北海道編』博文堂，1937，p. 325
- 中西僚太郎「鳥瞰図絵師・松井天山の画業と画風」（『千葉大学教育学部地理学研究報告』13，2002），pp. 11-20
- 中西僚太郎「明治・大正期の松島を描いた鳥瞰図」（『平成15～18年度科研費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 近代日本の民間地図と画像資料の地理学的活用に関する基礎的研究』，2007），pp. 29-44
- 長瀬昭之助「吉田初三郎」雑考Ⅲ 初三郎と関係した人物と場所」（『古地図研究』307号，2000），日本古地図学会，pp. 20-26
- 堀田 典裕『吉田初三郎の鳥瞰図を読む』河出書房新社，2009，p. 151
- 益田啓一郎『美しき九州「大正広重」吉田初三郎の世界』海鳥社，2009，p. 111
- 湯原公浩編『別冊太陽 大正・昭和の鳥瞰図絵師吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社，2002，p. 150
- 留辺薬町「礎 るべしべの歴史をたどる」（『広報るべしべ』，2005），p. 3